

3

2021/MAR  
誠美保育園

## きつと明日は

3月に入り、春を感じる穏やかな毎日が続いていたというのに、この日を狙いすましたかのように登場した低気圧。何もこの日に来なかったと、みんなで天を仰ぎ、今年の園庭開催を諦めたのが：先日の卒園式でした。

私たちには、記憶に残る卒園式があります。それは、2011年3月12日。

あの大地震の翌日、まだ何が起きたのか、十分に理解できぬまま、早朝から、手分けをして、電話で卒園児家庭の状況を確認をして、無我夢中で開催したことを覚えています。今年卒園するご家庭の中に、お兄ちゃんの卒園式がその10年前の式だった：そうしたご家庭もありました。

このパンデミックを私たちが実感し始めたのは、ちょうど昨年の今頃でした。当時は、まだ得体の知れないウイルスへの不安を抱きながら、急遽、卒園式の内

容を変更するという大きな決断をしました。た。

その後、初めての緊急事態宣言が発出され、一瞬息をひそめた私たちでしたが、だんだんと、子どもは重症化しにくいことや、子ども同士の感染リスクは極めて低いことがわかってくるに連れ、子ども同士で過ごす園の日常だけは、いつも通りに戻していくことができたのは、幸いなことでした。

その一方で、日本全国、あまたの保育園、幼稚園、そして学校でも、ものすごいことが起こっていききました。それは、「行事」の見直し。保護者の方を交えた集合型の行事については、一定の配慮が必要だったためです。

今まで、当たり前のように実施していた行事の意味とは、一体何だったのだろう：日本中の従事者、保護者たち、みんなが自問自答した一年だったのではないのでしょうか。

「縮小」などと表現されることも多かった、今年度の行事。しかし、今一度、そのエッセンスを問い直していった結果、う話しました。「今年の式が特別なのではない。これからは、これが、うちのスタンダードになる。」と。

私たちには、記憶に残る卒園式がありません。それは、2021年3月13日。

きつと忘れることはないでしょう。あの大雨の日、当園の在園記録を16年に塗り替え、いよいよ本当に卒園される家庭があったことを。

そして、雨の上がった夕方、東の空にかかった、大きな虹のアーチをくぐって、「誠美保育園」、最後の卒園児たちが、巣立っていったことを。

園長 折井誠司

例年以上に、洗練され、子どもにとって、意味深い内容となった：そうした側面もあったように思います。

園生活や活動を直接ご覧いただき、育ちをみんなで感じ合っていたい：その思いは、その通りなのです。ただ、それを「集合型」の大掛かりな行事で実現しようとする、なぜかそこには、子ども本来の育ちとは少し質の違った、保育者や保護者たち、大人特有の思いや期待が、まとり付き始めるようにも感じるので

。「行事を、子どもたちの手に取り戻す」

私はよくそうしたものの言いをします。それは、大人たちの安心感や満足感よりも、「子どもたちにとって」の意味や価値を、少し優先していき

たいという思い。  
実は卒園式の中でも、今年度に巻き起こったそうした騒動を、「保育界のターニングポイント」と



者、園の3者それぞれが思いを語り、一緒にこの節目を祝い、味わう、一味違った卒園式へと再編を試みたのでした。そして、式の中で、こ

● 編集 誠美保育園  
● 発行人 折井誠司  
● 印刷所 誠美保育園  
● 発行所 社会福祉法人 誠美福祉会

〒192-0364 東京都八王子市南大沢5-1-2  
電話 042-675-1155  
ファックス 042-677-5643  
E-mail: sebi@nokken.jp  
http://nokken.jp/